

平成26年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	防災をキーワードとした協働作業と理解深化の試み	
実施組織 (または対象のカリキュラム)	理学部地質科学科	
※連携する他学部・機関がある場合は記入	全学教育機構	
実施責任者(所属)	吉田孝紀 (理学部地質科学科)	
取組の目標	「防災」をキーワードとして地質学に基礎をおいた問題発見と解決方法を見いだすこと	
1. 目標達成のために行った活動と成果 (箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)	<p>1. 【具体的体験】 一昨年、斜面災害を被った被災地(長野県阿南町と南木曾町)で地元の防災担当者、町議会議員、復興対策事業担当者、建設コンサルタント技術者からの聞き取りを行った(9月下旬と10月上旬;阿南町では参加者30名、南木曾町では10名)。南木曾町での聞き取りでは、「何が住民から求められているか」といった「社会要請」の把握と、「教室で学んだ知識がどう役立つか」といった質問を設け、それに対する回答をレポートとして課した。提出されたレポートの内容から、自分の専門分野を背景とした問題意識を喚起することができたといえる。</p> <p>2. 【基礎知識の習得と考察】 斜面災害の専門技術者を招き、「問題解決のためには何を学べばよいか」「講義で習得した知識をどう応用するか」といった設問を介して、教員と専門技術者とともに議論を行い、問題意識の深化を図った(参加学生20名)。この取り組みでは、11月上旬~中旬から下旬の3週間においてコロキウム2と地質調査演習の時間を利用して、大手建設コンサルタント技術者を招き、講義と議論を行った(専門技術者2名を招聘)。</p> <p>3. 【グループワークによる議論と提案】 グループ毎に「防災」「減災」のための方策を得るために、現状での問題点の洗い出しを行い、レポート提出を課した。2で取り組んだ成果を基に、グループ内で議論を行い、学生自ら被災地域の地形・地質を既存の資料や地形図を利用して調べ、実現可能な具体的提案を作成した。作成されたレポートは、専門技術者によって評価された。この活動を通して、グループ活動によってお互いの学修を助け合い、個人の理解を深めることができた。また、教員や学外の専門技術者とのやりとりを通じて、学生の議論を刺激し、学生が作成した提案の具体性を深めることができた。</p>	
2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望 (達成の度合いを選び、そう評価す	<p>a. 達成できた</p> <p>b. おおよそ達成できた</p> <p>c. 半ば達成できた</p> <p>d. おおよそ達成できなかった</p>	<p>(そう評価する理由)</p> <p>数回のレポート提出とその中に記述された感想では、机上の授業では得られない議論ができたとの評価を得た。また、災害現場での地元住民や復興対策事業担当者からの聞き取りに際しては、専門分野に対する社会的要請の高さを実感した、といった感想を述べた学生が多かった。また、講義を担当し、レポートを読んで意見を寄せた学外の専門技術者からも充実した議論となった旨の感想</p>

<p>る理由と今後の展望を記述)</p>	<p>e. 達成できなかった</p>	<p>を得た。これらの点から、十分な目標達成がなされたと判断される。</p>
		<p>(今後の展望)</p> <p>南木曾町での災害現場での聞き取りに参加した学生は約10名であった(大きな被災地であったため、大人数での見学を控えた)。少人数であったので、その後のグループ学習の時間確保をスムーズに行うことができた。しかし、当初計画していた応用地質学コースの全学生(15名)が参加した場合、学生同士の共同作業の時間が確保できず、困難が予想される。そのため、1ヶ月間程度の比較的長期間を割り当て、十分な時間確保を行うなどの改善が必要である</p>